待降節第１主日　2019.12.1

目を覚ましていなさい

マタイ 24 章 37-44 節

（その時、イエスは、弟子たちに言われた。）「人の子が来るのは、ノアの時と同じだからである。洪水になる前は、ノアが箱舟に入るその日まで、人々は食べたり飲んだり、めとったり嫁いだりしていた。そして、洪水が襲って来て一人残らずさらうまで、何も気がつかなかった。人の子が来る場合も、このようである。そのとき、畑に二人の男がいれば、一人は連れて行かれ、もう一人は残される。二人の女が臼をひいていれば、一人は連れて行かれ、もう一人は残される。だから、目を覚ましていなさい。いつの日、自分の主が帰って来られるのか、あなたがたには分からないからである。このことをわきまえていなさい。家の主人は、泥棒が夜のいつごろやって来るかを知っていたら、目を覚ましていて、みすみす自分の家に押し入らせはしないだろう。だから、あなたがたも用意していなさい。人の子は思いがけない時に来るからである。」

説教

さむ～い、起きれない！

布団からでるのがつらい時期がいよいよ本格的に始まりました。

でも、きょうの福音は「目を覚ましていなさい」です。まさか、寒いからといっていつまでも布団の中でグズグズしていないでもう起きなさい、という薦めではないでしょう。

> **そのとき、畑に二人の男がいれば、一人は連れて行かれ、もう一人は残される。二人の女が臼をひいていれば、一人は連れて行かれ、もう一人は残される。だから、目を覚ましていなさい。**マタイ 24:40

「連れて行かれ」とは穏やかな言い方ではありませんが、再臨のイエスといっしょに行く、つまり救われることを指しているのでしょう。一方「残される」とは、取り残される、救われないことをいっています。なんと確率は

５０％です。二人に一人しか救われないと福音は告げています。自分はこのままで大丈夫か？たいていの方は不安に思うでしょう。
よし、起き上がって「いい事」をしよう、もっと「お祈り」を熱心にしようなどなど、行いや信仰にさらに磨きをかけることで二人のうちの一人になろう、不安を打ち消そう、救いを確かなものにしよう、というのは正解のようでそうではありません。
イエスさまは目を覚ましていなさいといいますが、「寒いから布団からでれない」気にすることはありません。そもそも「寝たきり」の方だっています。病いでどうしても起き上がることができない方に「一人は連れて行かれ、もう一人は残される」なんて無慈悲なことをいう訳がありません。そんな神さまだったら誰も信じやしません。
いつまでも「起き上がる」ことができない。わたしは辛くて辛くていつも神さまにお願いしているのに「救い」がやってこない、ということはあります。というよりそんな事はしょちゅうあります。これは多くの方の実感でしょう。
言い方をかえればわたしたちは「待ちくたびれて」います。そこである人は献金を多めに包んだり、善行をせっせと行なったりします。悪いことではないですが救われるという保証になりません。神さまは献金額や善行を救いの基準にしているとは思えないからです。
ではどうすればいいのか。それは自分のちからに頼らず、神に信頼をおいてすべてをゆだねることです。いっけん何もしていない、何も変わっていないように見えますが自分に頼らず神を「待つ」ことです。
待ちくたびれた、とはいわずに「待ち望む」、そのこころを一人ひとりの中に送ってくださるように祈りましょう。人間には限りがあり、自分で自分を救うことはできません。クリスマスを控えた待降節第一週のきょう、神さまにより頼むこころがより強くなるように願い祈りましょう。